国語 3年A組	ちいちゃんのかげおくり —何十年か前の戦争ってどんなもの—	志場　俊之

1．単元について

（1）単元設定の理由

「ちいちゃんのかげおくり」は，「かげおくり」という遊びを題材にした戦争文学である。その「かげおくり」をしながら空へのぼっていったちいちゃんを通して，戦争への憤りが伝わってくる作品である。

「かげおくり」をする場面は3回ある。

1回目は，ちいちゃんが初めてするかげおくりである。それは，お父さんが出征する前日，先祖の墓参りに行った帰り道に家族4人で行った。4人が手をつないだ影は，青い空へ大きく映し出される。お父さんを中心にしてお互いに声をかけ合う姿に家族4人の仲のよさが感じられる。

2回目は，お父さんが出征後，お兄ちゃんと2人でするかげおくりである。いろいろな影を空に送っている様子から，お父さんに教えてもらった「かげおくり」に対する印象の深さが感じられる。それは，2人で行うかげおくりであり，決して家族4人では行えないものである。

3回目は，ちいちゃんが，「たった1つのかげぼうしを見つめながら」たった1人で行うかげおくりである。家族の声が青い空から降ってくるように聞こえるほど，ちいちゃんは家族に会うことを願っていた。と同時に，ちいちゃんの体は衰弱していた。「暑いような寒いような」「ひどくのどがかわいています」「ふらふらする足をふみしめて立ち上がると」「青い空からふってきました」など，ちいちゃんの言動から想像できる。そうして，青い空にくっきりと浮かんだ白い影は，ちいちゃんの幻想の世界であり，空の上で家族との再会を喜んでいるちいちゃんの様子を思えば思うほど，読み手に，戦争に対する激しい憤りを感じさせていくのである。

空襲を受け逃げ惑ううちに，お母さんやお兄ちゃんとはぐれてひとりぼっちになってしまったちいちゃんが，孤独感や恐怖感を感じながらも何日かのひとりぼっちの夜を迎えなければならない現実があった。見つからない家族を探し続け，1人で何日も過ごすちいちゃんの思いはどうだったのだろう。戦争を憎むでもなく，お母さんたちに会いたい1心で探し回り，幻想や死をもって家族に会えたことに対して，「なあんだ。みんな，こんな所にいたから，来なかったのね。」「きらきらわらいだしました」「わらいながら，花畑の中を走りだしました」など，戦争については何も語らず，ただ家族に会いたいという願いだけを持ち続けたちいちゃんのひたむきで純粋な心を思うと，ちいちゃんの願いが命と引き換えにかなうという現実が悲しい。

戦争は，幸せな家族を離れ離れにしていく。幼いちいちゃんのような子どもまでもが命を失ってしまう。これによく似た形で家族を失い，命を落としていった子どもたちは少なくないであろう。この作品を通して，戦争に対するものの見方や考え方をしっかりと持ち，命の尊さや平和の大切さを感じ取ってほしいと願っている。また，これをきっかけにして，戦争文学にも興味を持たせ，読書の幅を広げられるようにしたいと願う。

この世の中は戦後の世代が多くなり，戦争の話も聞けなくなってきている。3年生にとって学習として初めて出会う戦争文学だからこそ大切に読み，戦争という現実が数十年前に実際にあったこと，平和は戦後に生きる人たちが自分たちで築いてきたものであるということ，これからの平和は自分たちが築いていかなければならないということ，それらを文学を通して語ろうとしている人たちがいることなどをおぼろげなりとも感じてほしいと考え，この単元を設定した。

（2）単元目標

- 初読でつかんだ読みを，場面読みを通して深めながら，作品の意味をつかむことができる。
- 作品のそれぞれの場面の様子を的確にとらえ，それらを比較したり深めたりしながら，情景や人物の心情を深く読み取ることができる。
- 戦争文学の作品世界に迫ることができる。

（3）単元計画　ちいちゃんの見る空

第１次　「ちいちゃんのかげおくり」をどう読んだか。(2時間)

第１時：「ちいちゃんのかげおくり」を読み，初発の感想を書く。(全体像をつかむ)

第２時：感想を交流し，学習のめあてを持つ。

初読で持った考えを第2次で修正しながら、全体像のつかみ方を修正していく。

第2次　「ちいちゃんのかげおくり」を「空」をテーマにして読む。(5時間)

第１時：家族そろってかげをおくった青い空。家族のあたたかい愛情に包まれているちいちゃん。(１場面)

かげおくり・大きな記念写真・体の弱いお父さんまで「広い空は，楽しい所ではなく，とてもこわい所にかわりました。」

第２時・第３時

：飛行機が飛び回り，爆弾を落とすこわい空。ひとりぼっちになったちいちゃん。空襲後のくもった暗い空。母と兄を待ち続けるちいちゃん。(２・３場面)

空襲警報・ほのおのうず・お母さんとはぐれる・家は焼け落ちて・暗いぼうくうごうの中・くもった朝・また・暗い夜

第４時：幻想を映し出した青い空。空で家族に再会できたちいちゃん。

１場面でかげおくりをした青い空と比べながら読む。(１場面と４場面)

お父さんの声が青い空からふって・たった一つのかげぼうし・きらきら

第５時：青い空から見守る何十年後も含めて，ちいちゃんの見る空について考える。(１～５場面)

それから何十年・青い空の下・きらきら・１から４場面と５場面の空への思いを比べる。

青い空

思い出・願い

空襲警報・暗い空

青い空

何十年後の青い空

第３次　読書の幅を広げる。(3時間＋α)

第１時：「ちいちゃんのかげおくり」と比べながら，戦争文学を読む。(家庭学習にも含める)

第２・３時：「ちいちゃんのかげおくり」についての感想を書く。

２．単元の考察

（1）主題への迫り方

「ちいちゃんのかげおくり」を，「空」というキーワードで主題へ迫ろうと考えた。

第１場面の，楽しい家族のかげをおくった空。父がいくさに行った後も，家族を思い浮かべながらいろいろなかげを送った空。ちいちゃんにとっては理想の空である。第２場面以降，１転して爆弾を積んだ飛行機が飛び回るこわい空が描かれている。お母さんやお兄ちゃんと離れ，くもった暗い空に包まれていく。１人ぼっちでお母さんやお兄ちゃんを探し回る。家も失ってしまう。

第4場面には，再び「青い空」が現れる。しかし，ちいちゃんの体は衰弱し，立ち上がることさえもままならない。かげおくりの幻想，その幻想の中での家族との再会，そして死。第5場面は，何十年後の「青い空の下」が描かれている。「下」という言葉から「青い空」ではちいちゃんが今の子どもたちを見守っているようにもとれる。子どもたちとちいちゃんの生活の違いにも目を向けられる。

これらのことから，ちいちゃんにとっての「空」を学習していくことで，家族の絆，命の尊さ，平和への願いという主題に迫れると考えたのである。

第5場面で時代が変わっていることから，第4場面までを「ちいちゃんが見てきた空」とし，第5場面を「これから見たいちいちゃんの空」として比べさせた。「ちいちゃんが見てきた空」を子どもたちは，「暗い空」や「暗くてこわい空」「薄暗い空」と捉えた。そして，「これから見たいちいちゃんの空」については，「もし生きていたら，かげおくりができそうな青い空」「明るい空」「楽しい空」と答えていた。

戦争の時代と今の時代の空を「明と暗」で区別していたが，天候のことだけを捉えていないか確認のために，「暗い空っていうのは今日みたいな空ですか。」と問うと，「今日の暗い空は雨の降る空だけど，ちいちゃんの時代の空は爆弾が降ってくる。」「ちいちゃんの時代の暗いのは雰囲気のことで空がいつも暗いということじゃない。」「もし青くても爆弾が落ちてくるのは暗い空って呼んでもいいの。」「(戦争の時代に青い空で)もし，飛行機が飛んできても空は暗くならないから，青い空でも(戦争の時代は)雰囲気が暗いということ。」という答えが返ってきた。たとえ青い空であっても，戦時中の大変な時期と今をきちんとイメージで区別できていた。

また，「きらきら」の違いに目を向ける子もいた。「4場面のきらきらと5場面のきらきらは意味が違う。4場面はお父さんたちに会えてうれしいきらきらだけど，5場面は子どもたちの笑い声でうれしい，楽しいだけだと思う。」ここからも，時代の違いや戦争と平和という対比を意識することができていた。

今の子どもたちは，「ちいちゃんのかげおくり」の第5場面でもあるように，毎日「きらきらわらい声を上げて遊んで」いる。平和な社会に包まれ，それを当たり前のように享受している。それは，第4場面の，家族に再会して「きらきらわらいだし」たちいちゃんの様子とは明らかに違う。生まれたときから守られている社会の中で生きる子どもたちを，ちいちゃんの生き方とつなげ，平和への願いや家族の絆，命の尊さにあらためて目を向けさせるためには，それぞれの「きらきら」という言葉を比べることで，子どもたちの生き方に返すことが大切になる。

今の子どもたちの，家族に守られ安定した生活を送っている中で発する「きらきら」と比べると，なんとちいちゃんの「きらきら」は，命が消えているにもかかわらず，体全体で喜びを表しているように感じられることだろう。家族に会うことだけを思い続け，それがかなう喜びが，この「きらきら」の中にはある。読み手が，戦争を憎み平和の尊さを願う時，より1層，「きらきら」が重い意味を持ってくるといえる。

自分に返すための「自分はこの時代を見てどう思う？」という問いには，「ちいちゃんと同じ運命になって死ぬのはいやだ。」「命は1つしかないから。」「ゲームみたいにリセットできないから行きたくない。」と答えていた。

このように，ちいちゃんが見た空を自分たちも同じ視点に立って見ることで，家族の絆，命の尊さ，平和への願いという主題へ迫ることができたと考える。

（2）互いのまなざしが共鳴する実際の姿は

「ちいちゃんは幸せか？」という課題での話し合いで，「長い間聞けなかった声だけでも聞けたか

ら幸せなんじゃないか。」「青い空にお母さんたちが出てきて寂しさがなくなっている。」「空の上で家族に会えたから幸せだと思う。」「ちいちゃんが笑いながらだから，天国であっても幸せだと思う。」などの幸せだという意見と，「たとえ会えたとしても天国だから幸せじゃない。」「死んでいるときに会ってもうれしくない。死んでいたら悲しい。」「現実には会ってないから悲しいし，幸せじゃない。」などの幸せではないという意見が対立した。

話し合いの中で，自分がちいちゃんの言動について持った考えを友達と交流しながら，自分の考えと友達の考えを比べ，自分の考えと似たところと違うところを意識し，どこが違うのかを考えることで友達の意見のよさを認め，生かし，自分の考えを再び作り上げて友達に返していくことの繰り返しの中で，クラスの友達の意見を吸収した自分の意見を作ることができた。それは，友達の考えのよさを認めた考えの通い合いのあるものとなり，本文でのちいちゃんの言動をしっかりと押さえ，それと友達の意見を通して自分の考え方を修正していく場となった。

例えば，「生きているときに生きている家族に会いたかったと思う。死んでいたら何か悲しい。」や，「声とか聞けたのはいいけど，絵にもあるようにたった1人で寂しい。」「本人に会えなかったけど，最後，家族に空の上で会えたから幸せだと思う。」「死んでしまったら悲しいって言ってるけど，結局ちいちゃんは天国で会えたから幸せだと思う。」というように，自分の考えを述べる前に友達の意見をしっかりと受けた発言が続いた。

教師の話し合いにおける問いかけでは，「死んでしまったっていうのは(事実で)いいの？」や，「探しているところからずっと1人なんだね。」「天国で会えたら幸せなの？」「死んでいても？」「こんなのを幸せと呼ぶの？」「死んでいるとは自分では思っていないよね。」など，子どもたちの考えが固まりかける時の揺さぶりになるような問いかけを繰り返した。

最終的には，「ちいちゃんは，ここは天国だと分かっているか分からない。」「死んだら何にもならない。けれども，死んだことも知らないままでも，ちいちゃんは会えて喜んでいる。」など，どちらの考えにも子どもたち自身がなるほどと言える歩み寄りを示した。

ちいちゃんの心情や思いを，確かな根拠を持ち，感動と共にどうしても伝えたいという気持ちで伝え合うことがまなざしの共鳴につながったと考える。そうして，熱く伝え合う言葉に見え隠れした平和への願いや家族の絆，命の尊さなどを子どもたちにも見える状態にすることができた。

人間の生き方に関わる悲しみや怒り，喜びなどの主人公の生き方に心から共感を示す時に，また，どうしても伝えたいという思いの強さや迫力が相手に届いた時に，まなざしの共鳴も起こりえた。それは，物語の「意味」がそこにはあるからだと考える。互いのまなざしが共鳴するときは，物語の事象の本質や価値，真理など，「意味」に近づく考えを持てるときであろう。

3．成果と課題

今回は，「ちいちゃんのかげおくり」を国語科提案にもあるように，場面読みではなく，子どもたちが作り出す課題について，文章全体を通して，子どもたちの疑問や読み深めにつながる部分を焦点化して取り上げていく学習を行った。課題と課題のすき間を埋めるため，また，課題を物語の中の1部であることを意識させるために，単元の課題を点ではなく線で捉える必要があった。そのため，「空」という物語を通して考えられるキーワードを掲げた。低学年や中学年での全体読みは発達段階からして難しいと思われたが，線で捉えることでそれぞれの時間の学習の位置づけが子どもにもはっきりし，学習の見通しが立てやすかったのではないだろうか。また，教師側からの子どもへ返す言葉も，1人の学習者の立場で反対側の子どもの代弁をしたり共感したりしながら考えを揺り動かすことで，揺れる子どもの考えを確かなものにしたり，振り返らせたりするとともに，発言を誘発させることができると確信した。